

平成 18 年 10 月 21 日

## 2006 年総括

社団法人日本ボート協会

理 事 長 平 岡 英 介

強化委員長 細 田 眞

チームリーダー 細 淵 雅 邦

2006 年はアジア大会を残してはいるものの世界選手権を終え 2007 年に向け新たな強化を進める為に 2006 年の総括を行い 2007 年強化方針（別紙）策定の元とする。

### <2006 年強化方針と結果>

#### （1）A1 チーム 軽量級スカルの強化

ジョバンニ・ポスティリョーネ氏をヘッドコーチとし A1 を中心に強化。

武田・須田・久保の A1 選考（浦を強化指定したがチーム事情により辞退）。

欧州での 2 回の強化合宿（50 日・70 日 計 120 日）。

世界選手権 7 位（LM2X 武田・須田）。

LM2X はオリンピック種目の中でも熾烈な争いを繰り広げる種目で 2006 年度世界選手権では昨年より 4 クルー多い 28 クルーが出漕した。

上位 10 クルーは殆ど実力が拮抗しどの国も上位を狙える実力であるが日本クルーもその中に確実に力を入れてきた。

武田・須田の北京までの継続強化指定 8 月理事会承認（強化委員会上程）。

LM1X 久保は故障等もあり期待した確固たる国内ナンバー 3 のポジションは得られなかった

#### （2）軽量級スweepの強化

ジョバンニ・ポスティリョーネコーチの下エルゴ数値及び評価選考合宿・評価選考レースにより 6 名（3 ペア）を選考。

日本・欧州（50 日）での強化合宿実施。

欧州 50 日間をジョン・ホランドコーチと契約しクルーコーチとした。

クルーとしての完成には時間が不足であったこともあり世界選手権 20 位。

昨年より参加クルー数が増えたが（15→23）日本より下位のクルーは昨年の 4 クルーから 3 クルーであり厳しい結果となった。

この結果から 2007 年度世界選手権でのファイナル B 進出は厳しく北京オリンピックへの出場資格獲得は困難と判断せざるを得ない。

従来の強化システムではこれ以上の成果は望めず、ロンドンへ向け長期視野での新たな強化システムの確立が必要となる。

LM2- は予選から勝ち上がりファイナル B へ進出し全体の 9 位であった。ジョン・ホランドコーチは限られた時間の中精力的に指導し技術面で成果を上げた。しかし体力不足は顕著であり、冬場の体力トレーニング不足が問題点として指摘された。

### (3) 女子チーム 軽量級スカルの強化

ジョバンニ・ポスティリヨーネコーチの下エルゴ数値及び評価選考合宿・評価選考レースにより岩本・玉川を選考。

日本・欧州（50 日）での強化合宿実施。

玉川は U23 世界選手権にも若井と BLW2X に出場し惜しくも決勝進出を逃した（7 位）。

世界選手権は昨年より 6 クルー参加が増え 21 クルー中 15 位であった。

世界的に見ても女子（LW2X）は男子に比べ選手層が薄く、今後の強化しだいではファイナル B 進出の可能性を示唆した。

### (4) U23 の強化

12 月より継続評価し 3 月選手選考。

日本での強化合宿を経て U23 世界選手権派遣。

3 月に選手を選考し例年より長い強化合宿を計画したが対校戦・授業・全日本等の事情により計画通りの強化は出来なかった

女子軽量級についてはシニア同様世界トップレベルとの差は相対的に小さく入賞可能圏にある。

### (5) U19 の強化

高体連強化部と連携。

全日本ジュニア選手権にて派遣選手選考。

アジアジュニア選手権・世界ジュニア選手権派遣。

U23・シニアに繋がる強化を高体連強化部と計画したが日程（高校授業）・練習環境等の事情により目標とした成果を得るまでには至らなかった。

(6) 指導者養成

ジョバンニ・ポステリヨネコーチによる講習会を1月に実施。

同時にJOCとJISSより講義を受ける。

継続的な講習によりコーチのレベルアップが必要。

(7) ナショナルチーム候補選手加盟団体との監督会議

05年秋季に実施。

(8) その他

- ・ 欧州長期合宿を2期に分け効果的な強化トレーニング実施された。
- ・ 3人のトレーナーを欧州長期合宿期間中適宜派遣しコンディショニング上効果的であった
- ・ A1合宿のサポートに強化スタッフとして坂本を帯同させジョバンニ・ポステリヨネとA1チームを繋ぐコーチ補佐として機能した。

以上